

内田魯庵全集

11

小 説 Ⅲ

ゆまに書房

内田魯庵全集 第十一卷

五、五〇〇円

昭和六十一年八月五日 初版

著 者 内 田 魯 庵

編 者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 文勇堂製本工業㈱

発行所 ゆまに書房

東京都千田代区内神田一―五―十一 セントラル大手町
電話 (二九二)〇七九八
振替 東京四―六三一六〇

内田魯庵全集第十一卷／小説Ⅲ 目次

社會百面相	七
學生	九
貧書生	二〇
勞働問題	二七
官吏	三五
新聞記者	四二
教師	四七
精神家	五一
教育家	六一
新學士	七五
新高等官	八三
溫泉場日記	九〇
閨閣	九五

貴婦人·····	一〇五
新妻君·····	一一七
女學者·····	一二六
新詩人·····	一三四
ハイカラ紳士·····	一三九
宗教家·····	一五〇
獵官·····	一五九
代議士·····	一七六
增稅·····	一八三
虛業家尺牘數則·····	一九八
臺灣土產·····	二〇五
青年實業家·····	二一二
失意政治家·····	二一五
老俗吏·····	二二三
古物家·····	二三〇
老作者·····	二三九

變哲家	二四三
時代精神!?	二四七
鐵道國有	二五三
投機	三〇三
破調	三五一
犬物語	三八一
矮人巨人	四〇七
天下太平なる哉	四三三
革命會議	四四三
指環	四五七
女先生	四九三
すねもの	五二一
贗物	五五五
解題	五九七
解説	六三一

小

說

Ⅲ

社會百面相

社會百面相

學生

上

何れも二十歳前後の學生二十四五人、運動場の隅に集つてゐる。懣然と憤ほるものもある、昂然と嘯くものもある。傲然と矜るものもある、俯して砂上に字を畫するものもある、仰いで低聲に詩を吟ずるものもある、形勢頗る穩かならぬやうに見えた。

忽ち講堂の方より駈けて來る四五人。

『奈何した、交渉の結果は？』と此方の二三人は聲を揃へて叫んだ。

『駄目、駄目！』と四五人は高聲に叫びながら飛んで來た。

『奈何いふ風だつた、交渉の模様は？』と一同は四五人の周圍を圍繞きながら聲を等しく尋ねた。

『諸君、駄目だ、駄目だ、かたきし、話にならない』と鼻の下の薄墨のやうな鬚の生へた顔色の蒼白い一番

脊の高い男は口を尖らして、『ビリオド奴何でも試験をすると云ひくさる。僕らは級の事情から從來の慣例を種々訴へたが、渠中々諾かない——』

『失敬な野郎だ！』と一人は叫んだ。

ビリオドといふは歴史地理の受持教師で、鼻の傍に大きな眞黒な黒子があるのでビリオドと譚名されたのである。で、或る事情があつて殊に定期の試験を延期して貰ひたいと級の總代が此ビリオド先生に請願した始末を今復命するのである。

『ビリオドが云ふには、試験延期は級の輿論で無い。或人達は折角準備が出来たのを延期されては困る。試験準備の時間は十分あるといふ者もあると云つた。夫から僕らは夫は少數者でせうと云つたら、少數者かも知れないが、級の花と云はれる勉強家だと、暗に僕等延期説の者を怠情者のやうに言臭つた——』

『生意氣な野郎だ！』

『夫から僕等は、左に右く多數の希望だから、曲げて延期して呉れと、理窟を云はずに歎願に及んだ。處が奴、一步も退かない。頑として諾入れない。校長の命に由て規則に従つて試験するんだから若し不服なら校長に談判しろと云ふんだ。校長は病氣で寝てゐる。談判したくたツて出来やアしない。』

『失敬な奴だナ！』

『夫から諸君、迎も難かしいと察したから交渉の方針を變へて、今日の切迫した場合だから試験をするな

ら止むを得ないが、何卒^{どうぞ}點を易くして呉れ、此^ま以前のやうに百何名の級で四十人も落第點があつては級一同の難義だと肝膽を披歷して陳情した。處が奴、空嘯^そきやがツて、點は辛いンぢやないが諸君が出来ないんだ、好い點を欲しければ勉強しろと吐かしやアがつた。』

『咄^{とつ}、咄、失敬極まる！』と一人の色の黒い骨逞しき學生は怒髮冠を衝いた。

『逆^もも最う駄目だと思つたから諸君と協議する積りで一と先づ撤回したが、諸君、奈何する覺悟だ。甘んじて試験を受ける意^{つもり}か。ビリオド奴は平生我々の級を輕蔑して必ず淘汰すると云ひおるさうだ。此以前の試験に鑑みても解る。歴史地理なんでものは數學と違つて手心で辛くも易くも點を附けられる。我々は非常に勉強したわけでもないが格別勉強した覺えも無い。然るに四十人の落第者を出すといふは實に失敬極まる。幸ひ校長が盡力して呉れて十點乃至十五點宛^づ點を増して呉れて三人の外は悉く及第したが、渠は男らしくもなく之を遺憾に思つて今度の試験には必ず半分落第させると云ひおるさうだ。我々は歴史地理を専門に修めるものでない。我々は前途に大いなる目的^もを有つてゐる。區々たる歴史地理の爲め前途の目的を犠牲にするわけには行かぬ。』

『ヒヤ／＼ツ！』

『諸君、殘酷なるビリオドの手に死する乎、但し忍んでビリオドを殺す乎、諸君は此二つの中一を擇ぶべくある！』と巧妙なる辯士は鋭どく聴衆の情^{こころ}を挑撥した。

『勿論、那樣な奴の犠牲になつて堪^たまるもんか、』と丸顔の賢こげな眼附の十八九の學生は第一に口を切つ

た。『放逐策を講じやう!』

『放逐、放逐!』と二三人は雷同した。

『ビリオド如き奴は學校の爲にも惜むに足らぬ、』と丸顔の學生は仕たり顔に、『渠は檢定免狀を有つてゐる奴ぢやアない。變則の英語が出来るだけで何にも出来やしない。渠の教へる歴史地理は参考書さへあれば誰でも出来る。渠をして自ら試験せしめよ。渠必ず落第する!』

『ヒヤ／＼ツ!』

『奴は第一品行の善くない奴だ、』と眼のクリ／＼した五厘刈の大入道は口を出した。『奴の妻は下宿屋の下女だ。』

『下宿屋の下女?』と二三人は奇妙な顔をした。

『むゝ、本郷の下宿屋の下女だ。奴が下宿してゐる時分私通きやがつたのだ、』と五厘刈は得意の色を灰めかしつ、『奴の品行は能く知つてゐるが、奴は下女癖がある^{へま}と見えて今でも下女に這込む^{はひこ}。奴の家には下女が居附かない。何邊の傭人受宿でも奴の家は札附になつてゐる。』

『あの髻面が這込むのか——はツはツはツは!』

『女部屋の地理に通じてゐるだらう。』

『あはツはツはツ!』と一同は哄いた。

『奴は非常な吝嗇だ。』と又一人の角顔の近眼^{ちかめ}の學生はシャ／＼り出した。『奴の家へ行つた者で煎餅一枚

御馳走になつたものは無いぞ。』

『其様な事は奈何でも宜い。吝嗇でも下女癖でも宜いが、爰に見免し難い渠の破廉耻罪がある、』と一人の細面の眉毛も眼も細い學生は不相當に大きな口を開いて左も大罪惡を發見け出したやうに、『渠は君、酒の上が悪くて、先月の末だツた、酒に陥ひ酔つて違警罪を犯して一晚警察へ拘留になつた。新聞にも出された。不昧裁極まるぢやないか。餘事は兎に角、巡查の厄介になるやうな奴を我々の教師と仰ぐ事は出来ない。』

『勿論、』と一人は鳴響くやうな聲で、『放逐すべし!』

『諸君、』と級の總代の一人、脊の高い薄鬚の生へた男は再び一同に向ひ、『我々が渠の犠牲とならぬと決心した以上は放逐するより外仕方が無い。』

『放逐、放逐!』

『如何にして渠を放逐する?』

『校長に彈劾すべし!』

『ストライキ!』

『ヒヤ／＼ツ!』

とてんやわんやにワイ／＼騒ぎ立てる。

『諸君』と薄鬚の男は再び一同を見巡しつ、『我々は正當防衛の爲めビリオドの罪を數へて渠を彈劾して、

校長が渠を處分するまで級全駄ストライキをやらう。』

『ヒヤ／＼ッ！』

『ストライキ／＼！』

『てな事仰しやいましたかよ！』

殺氣忽ち漲りて、詠諧、嘲謔、罵詈、怨恨、不平、憤悶等の色各自の面に現れて風雲正に運動場の一角より起らんとす。さもさツても大變な騒動なり。

下

〇〇縣學生の合宿所の二階の隅に寄合ひたる三人。一人は薄鬚の生へた脊の高い林へ、ハッポといふ綽名のある男。何故へハッポといふのか意味は解らぬ。一人は五厘刈の大入道。原氏、綽名は鳥羽金、鳥羽繪の金太郎に肖てゐるからださうだ。一人は年の一番若い丸顔の愛嬌ある男、富山大之助、學校ではワンの助と呼ばれてゐる。何れも級の錚々たる豪傑でストライキの領袖株である。

『ピリオド奴、今度は弱つたらう、』とへハッポ君は薄鬚を撫でつゝ大得意で、『渠奴め學校を放逐されゝば飯の喰あげだ。』

『奴も閉口しおるだらうが、奴の唄めがブン／＼怒りおるだらう、』と鳥羽金氏はニヤニヤ笑ひながら、『奴はあれで高慢なをしおるが、唄の臂に敷かれて一言も無いンだ。』

『唄て、下宿屋の下女か？』とワンの助は訝かしげに云つた。